

技術移転手法事例研究

|   |        |      |   |     |         |
|---|--------|------|---|-----|---------|
| 地 | ア      | シ    | ア | 分   | 公共・公益事業 |
| 域 | スリ・ランカ | 0520 | 野 | 放 送 | 204040  |

テレビ番組企画製作に関する専門家活動報告  
(スリ・ランカ)

個別派遣専門家活動報告シリーズ —24—

昭和59年3月

国際協力事業団  
国際協力総合研修所

|         |
|---------|
| 総 研     |
| J R     |
| 84 — 25 |





技術移転手法事例研究

|   |        |      |    |    |         |
|---|--------|------|----|----|---------|
| 地 | ア      | シ    | ア  | 分  | 公共・公益事業 |
| 域 | スリ・ランカ | 0520 | 分野 | 放送 | 204040  |

JICA LIBRARY



1026714[4]

# テレビ番組企画製作に関する専門家活動報告

## (スリ・ランカ)

個別派遣専門家活動報告シリーズ —24—

専門家氏名： 丹 羽 甫  
担当分野： テレビ番組企画製作  
派遣期間： 昭和56年12月4日～昭和58年12月3日  
派遣国： スリ・ランカ  
派遣機関： 国営放送網—ルパバヒニ・コーポレーション  
本邦所属先： 日本放送協会（NHK）

本シリーズは、国際協力総合研修所の調査研究活動の一環として実施している技術移転手法事例研究のうち個別派遣専門家の現地活動について、要請の背景、業務の範囲と内容、業務の達成と具体的成果及び技術移転手法の実際例をとりまとめたものである。

なお、作成に当っては、専門家本人による執筆原稿を統一的な記入要領に基づき多少加筆修正した。

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 国際協力事業団             |     |
| 受入<br>月日 '84. 8. 29 | 120 |
|                     | 79  |
| 登録No. 10660         | IIC |

# 目 次

|  |    |
|--|----|
| 序 文 .....                                  | 1  |
| 1. 要請の内容と協力の背景 .....                       | 2  |
| 2. 要請業務と実施業務の範囲、内容について .....               | 5  |
| 2.1 一般（総合）テレビ番組制作（実施業務内容） .....            | 5  |
| 2.2 教育テレビ番組制作（実施業務内容） .....                | 7  |
| 3. 要請・実施業務内容について .....                     | 11 |
| 3.1 研修トレーニングについて .....                     | 11 |
| ① アドバイス、話し合い方式 .....                       | 11 |
| ② オンザジョブトレーニング方式 .....                     | 11 |
| ③ ワークショップ方式 .....                          | 12 |
| ④ 一般的なアドバイス .....                          | 13 |
| 3.2 テレビ番組制作手順について .....                    | 15 |
| 4. 業務目標設定と達成、成果 .....                      | 28 |
| 4.1 自主制作番組 2 時間枠の確保 .....                  | 28 |
| 4.2 熟練した制作委員プロデューサーを育成する .....             | 28 |
| 4.3 効果的、能率的な放送業務の運営体制を確立する .....           | 32 |
| 4.4 教育テレビの制作と教育現場での利用定着について .....          | 33 |
| 4.5 施設、機材の保守、スペアパーツなどの補充<br>などへの自助努力 ..... | 34 |
| 5. スリ・ランカ・ルパバヒニの放送と効果と提言 .....             | 36 |



## 序 文

### (1) 略 歴

慶応義塾大学、フランス文学専攻、大学院マスターコース終了後、NHK入社。

東京本部（1961～65）音楽、舞踊、ドラマ番組など芸能番組制作。  
旭川放送局（1965～70）学校教育番組を中心に芸能、報道番組制作にもたずさわる。

東京本部（1970～74）青少年向け番組を中心に、放送大学実験プロジェクトにも参加。

名古屋放送局（1974～78）教養家庭向け及びローカル番組制作担当。

東京本部（1978～ ）家庭向け番組の制作に当る。

(2) 派遣前に約1ヶ月英語研修を受講した。

## 1. 要請の内容と協力の背景

スリ・ランカ国営テレビ放送網・スリ・ランカ・ルババヒニ・コーポレーションは、日本政府の全面的な施設、機材の供与と技術協力によって作られた国営のカラーテレビジョン全国放送ネットワークである。これはスリ・ランカにとって初めてのテレビ放送施設であり、日本にとっても初めての放送網一式の全面的な対外援助といわれている。実際スリ・ランカには数多くの先進諸外国からの援助が行われているが、日本側の援助になるテレビ局と総合病院は一際、大きく目立っており、スリ・ランカの人々に強い関心と印象を与えている。スリ・ランカ、ルババヒニ供与についての簡単な経緯は1979年7月日本、スリ・ランカ両国政府間で総額37億円の無償資金協力に関する交換公文書調印、1980年3月建設工事開始、1981年11月全ての施設及びネットワークの建設が終り引渡式が行われた。

その後試験放送期間を経て1982年2月15日開局式典のナマ中継に続いて本放送が開始された。

その後1983年5月16日からは高等学校3年生向けの理数科6課目の教育テレビ放送が開始された。

供与施設の主なものは首都コロombo市にテレビ放送会館。テレビスタジオ2(200㎡、100㎡各1)の他ダビングスタジオ1室。1インチVTR収録再生機4台。1/4インチUマチックVCR収録再生機4台。中継車カメラ2台、VTR1台付き1台。ENGポータブルテレビカメラ及び録画機。主としてニュース・ドキュメンタリー番組の野外取材用として2台。スタジオTVカメラ5台。ピドルタラガラ放送所、キャンデイ、マドカンダ、ココヴィル中継所の1放送所、3中継局による全国放送サービス網をめぐらせている。

放送要員の研修について、スリ・ランカテレビ局で番組の制作、放送に従事する要員を育成するため1981年2月から技術要員11名カメラマン3名の研修が、JICAを通じ日本のNHK中央研修所で実施された。

同年7月から技術1名放送制作1名の研修、さらに日本人専門家として、6月から1ヶ月、NHKから、技術、制作、編成から各1名づつ計3名が派遣され間もなく開局されるテレビ局の要員の研修、番組制作組織規模などについてのアドバイスを行った。つづいて10月から2ヶ月間、NHKより、制作、美術、スタジオ制作技術、送信技術の専門家が派遣され、それぞれ必要な研修を実施した。そして同年11月及び12月から、完成したばかりのテ



レビ局に第3次長期専門家としてスタジオ技術と番組制作専門家が各1名づつ2年間の予定で赴任した。

赴任時の要請内容は教育テレビジョン番組制作指導ということになっていたが、着任してみると開局は2ヶ月先に迫っているにもかかわらず、TV局の運営方針、制作手順、番組編集目標、などが出来るどころかプロデューサー10名程が入局予定者として、ガランとした机や椅子も充分でない事務室に出勤していただいだけであった。技術要員の方は、ハード施設が11月に完成していたこと、機械が動かせないと放送は一切発信出来ないため技術要員の確保とトレーニングには十分な配慮がなされていたことでもあり、比較的粒ぞろいの要員が配置されていた。

放送法案が国会を通過したのが1982年1月7日であり、その後TV局会長MJペレラ氏、技術副総局長RTウイジャマネ氏、制作副総局長HMグナセケラ氏などが正式に発令着任し、技術の各部長職、制作の部長、プロデューサーたちが任命されて、入局、着任してきたのは1月の半ば頃からであった。他方開局、放送開始は迫りつつあり、開局前の準備をしなければいけない為すべき事は山程あるのに、予算はわずかのものが仮執行の形で認められているだけ、責任者はいない、新しく着任してきても経験もなく決定はなされない。開局準備としてしなければならないものを挙げてみると、

- ① どんな番組を作って放送するか、そのためにどの位の要員が必要か、予算はどうするか。
- ② どんな放送番組編成表を作るか。
- ③ どれだけの番組をあらかじめ録画しておいて、最初の1～2ヶ月を切りぬけるか。
- ④ どんなセクションを作ってどのセクションから整備してゆくか。
- ⑤ 開局の式典や行事をどうするか、それをどの様にナマ放送して盛りあげるか、等々。

数えれば切りがなく、開局早々に番組制作や放送技術に支障をきたす様なつまずきが出る事があればと思うと気が気ではなかった。さらにこの時期でまず何とか一人前に番組を作る事の出来るプロデューサーは2～3人しかいなかった。放送開始前の諸準備に併行して早急な制作要員の育成が不可欠の急務であった。

以上の経緯と背景が、派遣時の状況であった。

そして派遣時の具体的な要請内容は「教育テレビ番組の制作指導」となっていたが、この様な事情にあってはとうてい教育テレビのみを見ると言う訳には行かず、番組全体を見てほしいと言うスリ・ランカ側の申し出を断わることも出来なかった。

また、教育テレビ番組をやると言っても、その基礎となる番組作り、そのものゝ体制さえ整っていない状態では、番組作りの基本的な部分から手を付けていかざるを得なかったのである。

こうしたテレビ放送網が供与されたスリ・ランカは、印度大陸の南端からインド洋にこぼれ落ちた水滴の様な形をした島で、赤道上北緯7度から8度、面積は66,000平方キロ、北海道よりやや狭く、人口は1,460万人余り、1980年のワールドアトラスによればGNP一人当たり230ドル、成長率は約2%となっている。インフレ率は12%となっているが、2年間の実感ではもう少し高いのではないかと思われる。テレビセットの台数は当初5万台と言うことであったが2年を経た時点で25万台以上と5倍に増えている。

世帯数が約350万と言うから約1割の家庭にテレビが普及したといってもよいであろう。ただしテレビ1台当りの視聴者数は大変多い。大家族である上に地方のテレビ保有家庭には、放送中近所の人々が、多数見物に集り、その家の主婦たちは、その人々にお茶のサービスをするのに忙しくテレビを見ている暇もないと良く笑い話の種になっている。

スリランカ国民を構成する民族は、シンハラ族、インドアーリアン系の仏教徒が主で72%、次にタミール族、ドラヴィアン系のヒन्दウー教徒で20%。この二民族が中心であとは原住民のベッダと言うアボリジーン。

ヨーロッパ人との混血でキリストカソリック教徒のバーガー。アラビア人のモスリム教徒。などが残りの数パーセントに当る。国語はシンハラ語、タミール語の二つであるが公用語は英語が話されている。

## 2. 要請業務と実施業務の範囲、内容について

### 2.1 一般（総合）テレビ番組制作（実施業務内容）

ここで言う一般テレビ番組とは、その国の学校教育規程に準拠した教育テレビ番組以外の全ての番組を言う。そこにはニュース、時事インフォメーション、社会教育、幼児青少年スポーツ、情操、文化芸術宗教、歴史伝統、娯楽などあらゆる面にわたっての番組となる。

こうしたテレビ番組の制作に当っては、精密なエレクトロニクス機器を多数使用する一方、衣裳の作制、化粧品の使用、大小道具を作るための木工、ペイント、そのためのデザイン、台本などの印刷など数多くの関連工業、手工業、商業などに支えられなければならない。また、その国の通信交通機関とは深くかかわってくる。他方、生産された商品・放送番組を販売、消費するためには、テレビ受信機セットの購入が必要となり、それを保持するために電力の安定した供給、受信セットの修理業、難視聴地域を如何に解消するかといったことも見逃すことの出来ない背景として考慮されなければならない。同時に放送番組内容となる情報の選択と処理の方法は、特に開発途上国での国営放送ということになれば、その国の政治、行政、教育、情報諸機関との関連なしには考えられない。もちろん、その国固有の伝統文化、歴史、演劇、美術工芸、宗教、風土といった面への配慮は不可欠なものである。なお、近来国際化時代に入って、衛星などを利用した国際間のニュース、番組の交換への需要は急速に高まってきている。

テレビ番組制作とは、こうした情報を映像化し演出加工し速やかに各家庭の茶の間へとどけることで、人々の暮らしや、情操をより良い方向へとリードして行くものなのであろう。従って上記の様な方面への眼くぼりをなくして、番組制作技術だけを個別に移転することは、ほとんど不可能であり、また無意味なこととなってくる。

テレビは、その国の文化のバロメーターであるとはよく言われることである。テレビが出来ると言うことはその国のあらゆる分野に支えられ、刺激を与えていくものなのである。

それでは、こうしたテレビ番組の制作、放送のためにどんな作業が必要になってくるかを簡単に挙げて見る。

#### ○ 番組制作のための企画作業（企画会議）

番組という商品を生産するためにはプランニング抜きでは作業は進ま

ない。報道、スポーツ、芸能、社会教育、子ども向け、などの諸分野での個々の番組のねらいや内容を決める。

そうした番組制作に必要な予算、機械、人員、制作日数を決めて必要なリソースをわり振る。1日、1週間、1ヶ月、1年に放送する番組編成案を作り、期間生産作業の目安をつけるとともに、それに沿った企画募集をする。こうして一つの分野に偏らないバランスのとれた放送番組編成などの生産戦略を固めることが出来る。

こうした企画作業が制作要員・プロデューサーたちにオープンにされていないと、そのTV局のクリエイティブなエネルギーが阻害されて生産モラルの低下をきたす恐れがある。

○ 番組制作の手順と体制作りをする。

1本の番組を作る手順が人によってまちまちでは困るので、大まかな作業手順を決め、作業内容の分担を明確にし、制作スケジュールに沿った協力体勢をととのえる。大工、化粧、衣裳、画工、レタリング、タイピスト、カメラマン、照明、音声、ビデオエンジニア、アシスタントディレクター、運転手などが予定通り動かないと番組制作は不可能となる。

こうした作業手順が決められて初めて作業(労働)管理、品質管理などが可能となる。さらに付随して放送の体制、また災害や紛争時の緊急放送体勢なども必要となってくる。

○ 上部機関との接渉、消費者ニーズの把握。

とくに国営放送機関であれば、政府、行政部門との折衝、産業界との密接な連絡、視聴者動向などの調査も不可欠のものとなってくる。

○ 予算管理作業。

番組制作に必要な予算、機器部品の補充と補修のための予算、将来更に進歩してゆく技術機材の購入予算、放送制作規模を拡大するか固定するかによって補充する施設、機材の予算、番組販売や受信料収入の管理、機材施設の減価償却などの見積り、人件費、外部雇い上げ費用、出演料などの管理である。

以上の諸作業について、体制の確立と適切な直接、間接のアドヴァイスなしには、番組制作技術の援助はむづかしいことになる。

## 2.2 教育テレビ番組制作（実施業務内容）

以上一般番組制作について述べてきたが、教育テレビ番組制作については更に以上の他に特殊な条件が付け加わる。それはその国の学校教育システムとの関連と、教育機材としてのテレビの特性からくるものである。

○ 学校教育の何の過程に教育テレビ利用システムを導入するのか。さらには、どの教科のカリキュラムの何処をテレビ化するのがより効果的かテレビ利用の教室授業はどの様に進めるのかと言った部分を事前にはっきりと決めておかないといわずらに混乱を招くのみで何等利するところはない。

○ 教育テレビプロデューサーと教育テレビ番組の内容を台本にしたり、テレビの中に出演して授業する教師はどの様な役割りをもって互に関係しているのかをはっきり理解すること。ことに教育設備や機器、優れた教師の少ない開発途上国ではともすれば教育テレビ番組は、中央にいる優秀な教師の授業をそのまま録画して、教育のおくれている地方の学校で利用するといった考え方が支配的である。あるいは、もう少し努力して、中央の有名な教師が、自分で台本（授業プラン）を書き、自分でテレビに出演して番組を作る程度のものである。教室がスタジオに代り生徒がいる代りにカメラがあるといったダイレクトティーチングスタイルの番組がせいぜいである。この場合テレビと言う映像メディアの革命的な特質は何等利用されないまま単に有名な中央の先生の授業を写し出すための手段であるにすぎない。多少説明のための風景や実験などがインサートされることがあっても、その本質的な使われ方はただ媒介として、ひたすらその先生の声と字幕が次々と流れて行くだけである。

その結果はどうなるであろうか、このテレビ授業はほとんど生徒に理解されないままに終る。

教室授業では黒板に書かれた文字、式や図表は教師の説明の流れとは別個に何時でも何度でも生徒は見返すことが出来、理解を助ける。テレビの画面ではスーパーされた文字や公式、或はテレビ画面用に書かれた文字や公式は10数秒で消えてしまう、再び見ようとしても見ることは出来ない。

教室では先生は子どもの理解反応を見ながら授業を進めることが出来る、時には練習問題と生徒にやらせて知識の定着を計ることが出来る。

しかし、テレビ授業では教室の子どもの反応を見ることは出来ない。まして練習問題をやらせることは大変むづかしい。テレビ番組の放送時間内に予定された授業内容はとどこおることなく進められなければならないからである。テレビとはこう言うものなのである。革命的な映像メディアとしての長所もあれば、文字印刷メディアに対して決定的な弱点も持っている。この両者の長所欠点を理解した上で、互に補完し合うように教育の場で利用されることが望ましい。

○ 教育テレビ番組とは何か。

人間が教育によって次の世代へ伝えていこうとする知識、技術、文化は一部の技能芸術を除いて言語によって表現され獲得されている。そして文字と印刷メディアは人間にとって欠くことの出来ない大きな役割りを果している。従って、教えられた知識は生徒によって言語命題の形で、もう一度表現されない限り、習得されたと認められない。一方、テレビ・ラジオなどを中心とした視聴覚（映像）メディアの伝達教育手段は（コミュニケーション）言語や文字の理論ではなく、映像の因果関係で生起する。映像メディアで表現された出来事（知識）は強い印象で見る者の情緒や感覚に直接の刺激として働きかけ、認知作用を起す。

「百聞は一見にしかず」と言われるゆえんである。こうした映像メディアの特性を知った上で、これを視聴覚教育に導入することは教育の内容を豊かにし効率よく複雑な知識を伝えることが出来、言語教育を補ってゆくものとなる筈である。

このテレビ教育を実施するにはまず、言語教育カリキュラムのどんな部分が映像化し易いか、教科書のどのページが視聴覚化出来、どの部分は文字教育のままに残しておかねばならないかを、教育行政、教育技術の観点と、テレビ局の番組制作能力面の双方から注意深く決定されなければならない。次にこうして決められた一時限の授業の内容、それは言語論理で組み立てられている知識であるから、この内容を映像の論理に並べかえる作業がなされて番組化される。この番組が教室で利用される時には、今度は映像刺激、感覚的な所与を言語命題に整理し、置き換えて生徒の頭の中に言語知識として定着する様に手助けするのが、視聴覚教育の事後指導といわれているものである。

そして、この一連の作業のプロセスで、教師側の責任は、「どんな内

容を映像化するかを決める」ことであり、テレビプロデューサー側の持ちは「どの様な映像にするか」と言うことは自ら明らかになってくる。

そしてテレビ映像メディアの特性は、具体的で典型的な現象を、日常生活では簡単に行けない遠い所、外国や深い海の中、高い山の上など適切な場所を選んで撮ってくる事が出来る。長い時間、或は余りにも短い時間の現象を縮めたり引き延ばしたりして見せる事が出来る。

大変小さいものや、大きすぎるものを拡大したり、全体と見易い位置から映像化することが出来る。その他、高価な器具や薬品を使った実験も、国中の学校で行うのと比べれば安く安全に行って見せる事が出来る。或は重要なポイントをドラマタイズして見せるなど様々な特質をもっている。

こうした映像特性と利用した理科番組の例を挙げて教育に於ける映像効果を説明してみよう。

映像メディアで、よく採られる方法は、先ず具体的で驚ろくべき現象や行動を提示する。そしてその中から何故だろうと言う強い興味と疑問を持たせる。この疑問が、この番組を進めて行く上での大きなモチベーションとなり、その中から様々な解決や解釈への仮説が導き出され、正しい方面へと導かれて行く。(トライアンドエラーで時には誤った方向へ行くことも効果的な教育となる)

こうして番組のモチベーションと学習のモチベーションが一致して、生徒は大きな興味と疑問を持って問題の解決に乗り出す。これが典型例であるが先生は十分な学習動機を与えられ、映像の進行と共に考え方(科学的な)のトレーニングを知らず知らず受け入れ、事後指導や発展学習に於いて、細かい数式、公式、言語命題を強烈な映像刺激とともに獲得してゆくことになる。従って言語教育では演繹的であるのに対し映像教育では帰納的であることが多い。

このように教育テレビ番組はどのような準備と用意の上で作られるものかを理解し、さらに単に作って放送するだけではなく利用側教師による事前、事後の指導が如何に大切なものであるのか理解する必要がある。

番組は印刷教材と異って抽象理論を記憶させるのに適していないが強い関心を起させる事が出来る。

- 学校の教室でテレビセットを何処へ置くか、機器の保守は誰れがする

か費用は。

○ TV番組利用の方法は放送同時ナマ利用するのか、その場合、教師にとっても初めて見る内容なので、番組内容のパンフレットを事前に作って配布し、事前、事後指導に役立てるなどの手立てをするか、録画教材として利用するのか。その場合は、VTR録画再生機が必要となり、録画する人、その番組を事前に視聴して授業プランを作るなど、大変な手間と努力が必要となってくる。

○ テレビ教育番組を1.2年の教育過程のどの学年に導入するのか。

スリ・ランカでは、高校3年の理科クラスと言うエリートクラス用のみテレビ教育を導入している。テレビを利用出来るのは、全生徒児童の2~3%であり、彼等は大学の医学部、工学部へ進学するエリートである。

出来るだけ効率よく、多数のエリートを育成することが開発途上国の要請であることは理解できるが、テレビ利用教育は大学受験直前の知識詰め込み型教育に適していない、むしろもっと低学年の学力の底上げに適している。その意味ではまさにブロードキャストであって、ナローキャストではないのである。なおスリ・ランカの大学入学者に要求されている知識は、広範な暗記型のもので、理解を要求するよりは、所定の範囲の知識をどれだけ正確に再現するかと言った点にある。

従ってテレビ教育の導入は、この国の教育行政に大きな変革をもたらそうとしている。そしてこの動きは今後このこされた課題となっていくであろう。そのためにもTV・映像メディアの教材と文字・印刷メディアのそれとの違いをはっきりと認識し、適切な利用方法、制作方法を確立しなければならない。スリ・ランカでは、この面での理解、即ち教育制度上の対応が大変遅れている。



### 3. 要請・実施業務内容について

#### 3.1 研修トレーニングについて

業務背景で述べたように、テレビ放送の実施はスリ・ランカにとって初めてのことであったので、具体的な要請内容を出してくるだけの経験がなくとにかくテレビ放送が出来るようにしてほしいと言ったこととか、番組制作に万能のスキルがあれば教えてほしいと言う程度の漠然としたものにならざるを得なかった。したがって、業務内容は、単に番組制作指導だけでなく、制作手順の設定運営といった基本的な部分にまで拡がってこざるを得なかった。また、放送開始の諸準備が遅れたため、急いで実戦的な効果を挙げざるを得なかったと言う二つの理由から以下の指導方式を当方のリードで設定実施せねばならなかった。

##### ① アドバイス・話し合い方式

主に制作方式、手順、或は業務、作業工程の設定、業務管理、品質管理、こうしたもののスムーズな運営、情報処理産業の基本的な考え方と言ったものを、テレビ局の上層部の人たちにアドバイスしてゆく、アドバイザー的な方法、時にはテレビ局の上部機関である、内務省や文部省、スリ・ランカの社会に強い影を持っている文化人、映画監督、脚本家、などにも働き掛ける必要があった。なお2年目からは、これをフォームの形に定着させ、毎週月曜日の午前中各番組制作グループのユニットヘッド（部長）職を中心とした人々に集ってもらって合同討議方式で進めていった。理由は一人にアドバイスしても中々共通の了解決定事項にならないこと、反対意見が出た場合の処理がむづかしいこと、各セクションによって利害が対立した場合の調整がしやすいことなどである。

公開討論方式、フォーラムと呼ばれた。

##### ② オンザジョブトレーニング方式。

実際の放送のための番組制作のプロセスに終始タッチしながら現場教育をする。一人のプロデューサーが、番組を企画し、内容を決め、取材をし、スタジオプランを作り、セットを注文、リハーサルをし、台本を書き、スタジオで録画するまで、マンツーマンで手とり足とりで教える。

それはカメラ割りの一ツツ、技術スタッフとの対応、出演者演出の全て、大小道具の指定、取材段取り、参考文献調べと全てにわたる。

およそ2～3週間で、一つの番組制作が終了すると、次の制作グルー

ブへと移る。

この方式は大変实际的で、研修の講議などで説明しつくし難い微妙な間とかコツといったものまで教えることが出来、一度このマンツーマン方式のオンザジョブトレーニングを経験すれば、一応一人前のプロデューサーとして通用する。それ程徹底して訓練することとなる。この方式は双方の人間関係には大変良い、一種の師弟関係、親友関係に似たものが成立する。

反面まだ順番の廻って行かない人たちから軽いねたみに近い反撥を受けることがある。また単独作業と比べて時間がかかること、こちらはたった一人なのに相手は入れ換り立ち変わり次々と待っているのも、疲れて身がもたなくなる恐れがある。しかし一方では、その国の背景にある文化、表面に表れにくい人々の人情や考え方などが良く解り、その国の文化や社会を理解するのに大変役立つ。

こうした方式は、とりあえず何人かの一人立ちしたプロデューサーを即成で作らなければならない様な場合に最適である。また講議や書物などで理論はよく解っても、中々実際現場で実行出来ないといった傾向の強い途上国のインテリを実戦的に鍛えるにはもってこいの手段である。

### ③ ワークショップ方式。

この方式は講議とオンザジョブトレーニングを併用したものである。

①の業務手順の意義、情報処理の方法、考え方を中心に講議で説明し、②の実際の制作については、参加者の全員に自分の番組提案を持ってきてもらい、企画の改善から始めて取材、リハーサル、技術ミーティング、スタジオプラン、台本と全ての作業を実際の制作作業と同じ手順でやらせる。例えば台本は自分で書いてきたものを一人一人黒板の前に立って書かせ、参加者に解る様に説明させる。そして動きの一つ一つ、カメラ割りの一つ一つを直して行き、皆でより良い方法をディスカッションして行くのである。だから余り長い番組は扱いにくい、せいぜい10分程度の討論、インタビュー番組、ドラマ、音楽、舞踊、キャンペーン、ハウツーもの、などになる。しかし、実際に制作するわけだから、良質の番組が出来たときは、他の短いものと組み合わせて放送することにし、少ない要員、機材、施設を使用した穴うめをすると共に参加者に自分のワークショッププロダクションも放送してもらえると云う良い意味での例にした。

また参加者も似た番組グループから4～5名、多くても7～8名止まりとし、全員が一本ずつワークショップ・プロダクションを作れる様にした。期間は2週間から1ヶ月にしたが、作業が中々先へ進まなかったり、実習に使うスタジオや機材が一般番組制作のために予定の日に使えなかったりして1～2週間の延期をせざるを得なくなることが多かった。

この方式も講義では良く理解出来るにもかかわらず、具体的な場合に実行出来ない欠点をカバーするために考え出したものである。

とくにテレビ番組制作に必要な計画スケジュールを立て、プロデューサーの意向に従って、全員が協同して仕事を進めなければならない業務で、スケジュール通りに進めると言うことと、全員が協同協力して組織的に作業するという点に関してカルチャーショックに近い反応を示すような個人主義的な文化伝統と無責任に近い末端業種の未成熟な条件下では、必ずしもプロデューサーのリーダーシップ不足を責められない困難があった。とにかくこのプラクティカル・ワークショップ方式は、一通りオンザジョブトレーニングが終った2年目に入ってから主な研修スタイルになった。オンザジョブでは一つの番組グループの責任者に当るプロデューサーの育成に当て、第2、第3のグループメンバーにあたるプロデューサーたちは、アシスタントとして見よう見まねで、一応の制作経験を持ち始めてきた時期に中堅プロデューサーの育成を目指しておこなった、集中研修とも言える。

#### ④ 一般的なアドバイス。

番組制作のあらゆる面についての質問に応じる。

さらにはもっと積極的に、制作中のスタジオや、リハーサル中に顔を出し、作業がどの様に実施されているか、どんな点で問題にぶつかっているか、教えた内容をどう実行しているかを、その現場でのやりとりで把握しておく。これは次のワークショップでどの点により多くの説明をして行かなくてはならないか、どの点で誤解があるかを理解するのに大変役立った。

〔例〕 ドラマの対話のシーンなどで、2人の人間の話している顔を1人のショットで切り返してカットを積み上げていく手法はよく使われるものである。この場合話している顔、または聞いている顔は、それぞれの登場人物の眼で見た顔でなければならない。

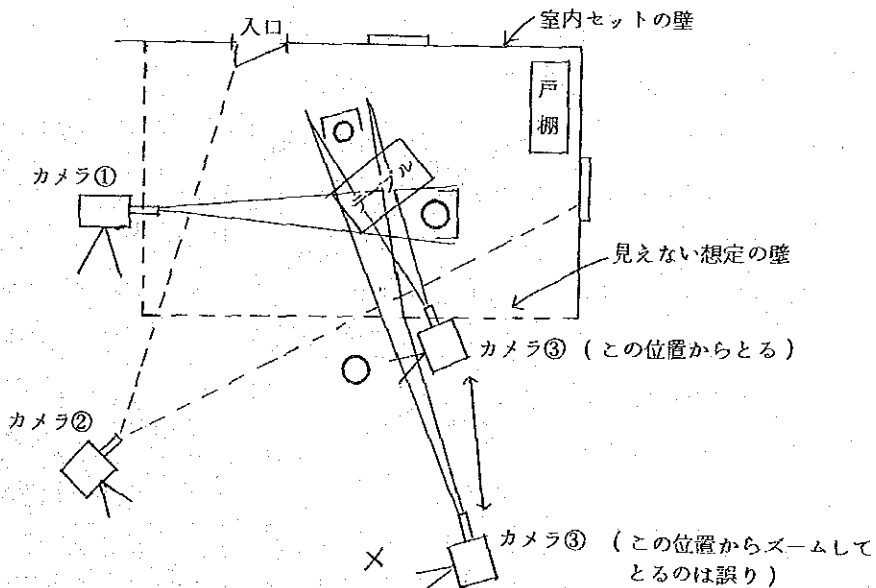
これだけのことが中々理解されない。

普通TVスタジオの室内のセットは二面の壁があり、手前の壁はあるものとして、カメラ撮影用に開けてある。しかし、各カメラは、この場合この見えない壁の内側にレンズを入れて撮らなければ、室内の人物の見た目のショットとしてのレンズ距離を保つことは出来ないのである。

カメラレンズの焦点距離を短かくして初めて、ドラマ空間が作れ緊迫感が生れる。しかし、現在の発達したカメラ機構はズームレンズを備えていて何時でも離れた所から望遠でワンショットを撮ることが出来る。

そしてこのズームアップの望遠ショットを室内の切り返しショットに使ってしまうのである。こうなるともうドラマ空間どころではなく、その視線は壁を通して遙かな向うから来ることになって誰れの見た目なのか、“透視の眼”が混入して、混乱するだけとなる。カメラマンに言わせれば、同じワンショットではないか、と言うことになるのだが、場面によってレンズの使い方にこれだけの違いがあることを理解させておかなければならない。普通はドラマの常識として処理されていることではあるが、こうした意外な面でのエラーから、テレビ空間とは、客観ショットと主観ショット、視線の方向と意味、など日本に居ては想像も出来なかった議論や講義が出来たり、カメラワークの講義のかっこうの取っ掛りが出来たりする。

(ドラマセットとカメラ位置)



こうしたオカシな画作りが出来るのは、カメラマンが、移動してとることが緊張の余り余り出来なくなって、とりあえず指示された画面をやってとりつくろうからでもある。

この外こうした実例は枚挙にいとまない程出てくる。この様な盲点を拾ってくるのも現場と常に接触を保っていなければ出来ない。

### 3.2 テレビ番組制作手順について

以上(A)で述べた四つのトレーニング方式を適宜時期に応じて実施してきた。テレビ番組生産過程には大ざっぱに言って40~50、細かく分ければ100以上の工程がある。これらは互に密接に結びついて、流れ作業の様にスケジュール通り実施されなければ、良い番組は作れない。そこでこの作業手順を整理して或る部分は、オブレーションワーク、業務命令として制度化してしまわないと全てが一人のプロデューサーの責任となってしまう。これでは一人のプロデューサーの手に余る。もちろんプロデューサーの仕事は、良きクリエイティブプランナーであると共に良きオーガナイザーでなければならないのではあるが。そこで制作手順の整理をすると共に、ストリームラインをリストアップして、制作、運営両面の目安とした。以下にまず制作手順の説明をややくわしく述べリストアップの表を提示する。

#### (番組企画提案)

これは、会議形式をとって制作担当者の意図を衆知し管理者はこの提案を受理決定すると同時に生産目標管理とチェックをする。制作担当者は、事前に調査取材をし情報を集め選択し一つの目的、価値観への統合をする。同時に制作に必要な機材予算人員などを要求する。この企画が審議される中で、予算、日時、機材、要員などが正式に決定され制作作業は正式に認可されたものとしてスタートする。この企画会議は全制作要員であるプロデューサーにオープンにされていなければならない。スリランカでは、時として政府の要人や局外の有力な知識人(金持ちでもある)などからの働き掛け、一通の手紙で一つの番組が決まることが多い。そしてその企画案は突然一人のプロデューサーのところへ或る日降りてきて総局長や、会長の個人的なささやきで決定する。技術や経理編成のマネージャーは何も知らない。

突然機材や予算や放送予定がこうした割り込みで狂ってくるプロデューサーにしても、必ずしも自分が情熱をもってやりたい仕事ではないけれど心ならずもやらざるを得ない。非常に個人の思いつきといった形で全体の運営が乱される。とは言え国営放送局であり、開発途上の国では、こうした緊急要請による情報衆知は避け難いし、一方では必要で大切なことであるとも言える。しかし、この場合でも、若し定期的な提案企画会議が機能していれば、その場でこの内容をオープンに決定し担当者を決め必要なリソースを確保するといった通常の公的な作業の流れに組み込むことが出来るし、放送枠も一定の時間帯を予定し、その枠内で放送すれば視聴者にとっても便利であろう。こうしたことでやっと設けられたのが週一回の制作会議であった。しかし、これも上からの通達の連絡会的な色が強く無理に皆の発言を求めたところ番組の合同評価会風なものになり、まともな企画会議的な審議は中々行われぬ。一つは個人主義的な文化伝統が強く、そうしたことは個人の仕事の範囲として相変らず個人の手紙や接渉によって何となく薄暗い所で力関係で決定して行くことが多い。また一方には狭い島国の中で何世代にもわたって出来てきた人同志のつながりから、人前で明らかに一人の人間の是非を論ずるといったことは避けられてきたと言う背景もある。それでは正式な提案伝票書式を作って各人に記入させて提出させてはどうかとすすめて見たところ、個人主義の反面で大げさな書式や規則の大好きなスリランカは、小生の試案として出した書式の何倍もある企画書案を作りあげてしまった。

日本の様な民主々義的なシステムはどうして根付かないのかと思わず考え込んでしまった。日本に居る間はそれ程民主々義的なシステムとも思わなかったけれど ………。とにかく今日も、総局長や会長室には提案のレターを持ったプロデューサー諸氏が列を成してインタビュー待ちをし、終っては小生のところへ来て上層部の人はテレビの実態を識らないから無理な注文が多くて困る、研修の本当に必要なのは会長や総局長なんだとこぼす者が多かった。これではプロデューサーのクリエイティブな参加感が疎外されモラル低下を来すだろうと何度も申し入れを行い、多少とも改善の方向に向ったのはやっと二年目に入ってからである。

しかし、人間の習慣的な考え方をを変えることは大変困難で、それも言葉の説明だけで。その意味でも、昨年1984年11月から副放送総局長の

H. ジカヤセーナ氏をカウンターパート個別研修で日本に送ることが出来、氏がNHKの制作プロセスを実地に見学したのは大変有意義なことであったと思う。なお、昨年同時期にそれまで会長のM.J. アレラ氏が代行していた総局長のポストに情報局のディレクターであったA. グナセケラ氏が天下りで就任したが、出来るだけ早い時期にマネジメントコースなどの研修に出すことが望ましいと思う。

(取材・下見)

番組企画が採択されると、具体的な演出プランの作成に入る。そのためには、番組にとりあげることを前提とした取材、裏付け取材、劇場での演奏、演劇公演の下見、出演交渉、スタジオで見せる道具類の準備、インサートするための出来事のビデオロケ、写真撮影、などが始まる。

ロケーションを行った場合は、カメラマン、照明、音声掛りの手配、ロケのための交通手段の確保、宿泊所や食事の手配、簡単な演出プランを書くことなど。

また出演料、車代、弁当、宿泊、軽食、人夫代などの予算チェックの一方、制作スケジュールの確定、時には衣装などの準備などがなさなければならぬ。これらの作業は、数多い停電、天候、交通手段の貧困、電話の不通、先方の責任者の不在、予算の少さなど、様々な条件によって、制限され、概して予定をオーバーすることが多い。しかし、制作担当者諸君は実によく働く。依頼の手紙を書き、仮コントラクトを作り、伝票を書き、現場ではねばり強く取材をし、皆TV局員の誇りを持ち喜々として早朝から深夜まできめ細かく想像以上に働く。こうした姿を見ていると一般に東西南アジアの人たちは働かないと言われていることが信じられない。

一定の条件、金(給料)と材料(機材・設備)と目的意識が与えられれば、どの国のどんな人でも良く働くのである。働らないのは、この中のどれか一つが欠けている場合だという感慨と確信を持たざるを得ない。

(スタジオプランの作成)

番組の内容が具体化してくると、スタジオのセットや配置、小道具などを作らなくてはならない。簡単な対談番組のセット、音楽番組にふさわしいもの、ドラマや子供用番組のセット等と多様にわたる。

美術デザイナーと打合わせをしてセットプランを作る。形や色の選定のほか、出演者の出入り、演技の方向、照明、マイクロフォンなどの配置場所、カメラの出入りのスペース、小道具などの位置や出し入れ、道具操作

員の出入り、予算、大工さんなどへの発注と完成見込み、スタジオ建て込みセットアップのスケジュール。化粧、衣裳の準備、などである。スリランカで今一番不足しているのはスタジオデザイナーである。

道具類の指定一つで、価格は安くも高くもなり、番組効果は良くも悪くもなる。出入口の無いセット、カメラでアップの取れないセットなど思わぬアクシデントが多いのもデザイナーに人を得ないからである。2〜3ヶ月の短期で充分であるから近いうちに専門家の派遣を実現してほしい。

見様見まねで、何とか今までお茶をにこして来たが、我々はデザインの専門家ではないので限度は自らある。開局前2ヶ月間デザイナーの派遣はあったが、当時から見れば番組内容はどんどん進歩しており、当時養成したデザイナーは、先頃の紛争で退職、インドへ帰ってしまった。残っているのはその弟子に当る人一名で全番組を見ている。大工の督促などから材料の買付けと夜も寝る間がない程忙がしい。この外プロデューサーは、番組で使用するタイトル文字、スーパー文字、教育番組などではグラフィック、表、数式、アニメなどの決定と発注をしなければならない。

（台本の作成）

テレビ台本と一口に言うが、これ程各国、各局によってまちまちな内容のものはない。

カメラマン用のショット（カット）リストだけのもの、台詞だけの要するに本といわれるものなど様々ある。

しかし小生はNHKスタイルの台本を指導した。それは、リハーサルや制作、放送スケジュール、台詞、歌詞、それにともなるアクション、スーパー文字の指定、小道具の指定、そしてカメラショットのサイズの指定とつなぎ、音声、音楽の指定、カットのつなぎ指定、つまりその番組を制作するのに必要なあらゆるインフォメーション、演出意図を一冊に表現したものを書く様にした。テレビ番組の制作は、カメラマン、音声掛り、照明、効果係り、ヴィジョンミキサー、アシスタントディレクター、出演者、伴奏者、大小道具の操作係り、などなど、多数の人々のシステムティックな協力で作られる。その場合そうした様々な部門の人たちがプロデューサーの意図を知る手掛りとなるのは台本しかない。台本の指示により自分の持ち場を知り、他部門との関連を理解することが出来る。こうした協力者はまた、それぞれの分野の専門家である。



若し困難な点があれば代案を出したり、加善案を出したり、或はより良い方法をプロデューサーに教えることが出来るのも台本があればこそである。従って台本には全てを書き込み、映像で、音で、演技で、カメラワークで、自分の意図を徹底して主張するつもりで書き込む様に指導した。そうして出来た台本を印刷してスタッフ、出演者に事前に配布して打合せをすることを強調した。

しかし、台本の作成でまた大きな困難に行きあたる。スリランカでは印刷技術は普及していない、従って数時間でガリ版製の台本が何十部と出来ることは不可能である。30枚の原稿でも6人のタイピストに分けてステンシルペーパーにタイプさせれば一人5枚で済む、それを合わせて印刷し、ホチキスのステーブラー止めにすれば、とすゝめても中々出来ない。紙がもったいない（実際紙は、スリランカでは比較的高い輸入品でもある。）、あとで変更が出ると困る、など言を左右にして実行出来ない。スリランカの人たちは、台本と言うものを重視していない様である。台本の必要性を感じていないのではないかと思われる。台本の重要なことを力説して、理解はしてくれるのだが、必ずしも全員が十分な台本を書こうとしない。

私が直接指導したプロデューサーは台本を書くのであるが、印刷する部門がないので、手書きしたものをゼロックスなどでコピーをとりホチキスで止めて製本するのがほとんどである。そして時には、その台本は2～3部しか作られず、スタッフの重要なメンバーには配られず、仲間のアシスタントや私の所へ持ってくるだけである。これでは意味がない。台本は私のために書くのではなく、君らスタッフのために書くのだと言葉をつくして説明するのだが ……………。

カメラマンにはショットリストと呼んでいる小さな紙片に手書きしたカット表を渡すだけ、これでは、プロデューサーは何故ここでアップショットを要求するのか、このパンショットにはどんな意味がこめられていてそれが演技と何の様に掛わっているのか理解しようもない。

「部下のスタッフには細かい事情を知らせる必要はない。言われた通り動け……………」と言うのだろうか。

テレビの番組制作とは、そんなものではない、一人のプロデューサーの命令で全て出来るものではなく、プロデューサーの意図・命令を理解したスタッフ全員のシステムティックな協力がなければ良い番組は作れない。

また自分の意図を理解させて初めてスタッフの心を把握出来るのだ。

良いオーガナイザーであり、リーダーシップをとるには、良い台本を書いて、番組意図を衆知させることが必要だと強調しつづけることになった。また台本を書く段階で、それを修正する段階で部長、局長は、品質コントロールが出来るし、そうしなければ製品の質の均一化、向上は望めない。

他方教育テレビ番組では、教師グループの内容チェックと打合せが出来るのも台本があればこそなのである。同様に技術部門の管理者も、台本の内容を見て初めて、カメラが4台必要だと言うこと、その他の技術機材が必要なことを理解し、そのための機器の準備や人員の配置を受け入れてくれようと言うものである。

二年間にわたって台本の重要性を強調しつづけてきて、新しい日本製のコピーマシンが購入されたけれども、まだ台本などの印刷部門が出来るまでには到っていない。

(番組の収録・放送(ナマ))

上記の準備が全て完了すると番組の収録、または放送(ナマ)がおこなわれる。

まず所定の時間に飾り込まれたセットをスタジオで点検する。

それがすむとスタジオにスタッフ全員を集め、台本を渡し、セットや小道具を見せ出演者の動きを解りやすく説明しながら、台本にそってカメラの1ショット、1ショットに至るまで、プロデューサーが説明する。

技術打合せと呼ばれるものであるが、プランニングミーティング、或はVTRミーティングとも言われる。スタッフは各々の持場に従って制作意図を了解し、疑問があればただし、もっと良い方法があれば、提案する。

こうして番組意図が全員に知らされたら、技術スタッフは、必要な機材準備にかかる、マイクロフォン、照明、カメラなどである。

この技術準備の間出演者が来局する。プロデューサーは、ここで出演者に台本を渡し、技術打合せの結果を踏まえて最終的な出演者打合せをする。演技や動きの確認、話の順序の確認、その話の中で見せる図表や、物、写真、インサートするVTRなどの確認、そして小道具、楽器、衣裳のチェックなどである。この後、技術準備の終わったスタジオに入ってドライリハーサルを行う。

これには全スタッフが立会って出演者が実際にスタジオのセットの前でアクションするのを見る。カメラマンはカメラを通さず肉眼で動きを見、音声係りはマイクを通さずに肉声を聞き、全体の感じをつかむ。

ここで、訂正、修正があれば全員に徹底させる。ドライリハーサルが終ると出演者は化粧し、衣裳をつけ、カメラリハーサルに入る。

ここで初めてカメラで切りとった画面でのチェックがおこなわれる。

番組の種類によって本番通りのリハーサルを行ったり、部分的な動きを中心にするリハーサルのみにして後は手順を示すだけに止める場合もある。

これらのリハーサルを通して細かいカメラサイズの調整、マイクチェック、照明効果のチェックを終って本番録画、または放送(ナマ)となる。

通常は一本の番組は途中で止めていわゆる部分どりすることなく所定の番組持ち時間5秒～7秒前に終了させ「終」のマークを入れる。

そして特にセットなどの建換えの必要から同一セットシーンのみを録画してしまうなど意図的な部分どりを除いては、ビデオテープの編集を必要とする撮りかたはしない。

しかし、技術スタッフなどの機器操作などの未熟、プロデューサーの指示手順の未熟さなどが原因で、もう一度最初からとり直しても時間がかかるだけで、今後はうまく行くと言う保証がない場合は適当な切れ目で切って部分撮りをしあとでVTRテープ編集をして一本にすることも次善の策として取られる。

以上の録画手順のうち、技術打合せ、プランニングミーティングの実施に大変苦労した。

プロデューサーがスタジオでスタッフ全員に自分の番組の意図を述べ、収録手順を一つ一つ確認してゆくミーティングが何故出来ないのか。

プロデューサーは大きな声でミーティングを進める代りに、うす暗い片隅で、カメラマンと、ヴィジョンミキサー(スイッチャー)とそしてアシスタントマネジャーと個別にひそひそ小声でささやき合ってはうなずいている。これでは時間が掛って仕方ないし、カメラマンたちから訂正意見は全員に衆知されず、その場になってスイッチャーが驚ろき、マイクが間に合わず、NG撮り直しとなる。機材や設備も少なく、次に録画しようとする番組や、その機材があくのを待ってロケに行くスタッフなどが目白押しになっている状態で、一番組だけが、スケジュールを押してくると、出演

者、車、などのキャンセル、再度のスケジュール作りなど、それこそ、マイナスの影響は大変なものになり、常にトラブルの原因となる。

大体この国では、皆が持場や仕事内容の違いはあっても、皆平等の立場で話し合う、討論するという習慣は無いらしい。

常に一方的な通達か命令、そして丁寧に穏やかな意見の表明はあっても、皆の前での自分を赤裸々に主張し、こだわりなく他人の意見忠告を受け入れるといった習慣がない。

また社会的な階級はインドと違ってゆるやかではあるが、多少残っている。そして代りに教育程度や、政治的な権力がそれにとって代られつつある。テレビ局の技術職につく人々は、たいてい、大学のエリートクラスである工学部の出身者が多い。そのため文科系出身者はやゝ引け目を感じていることもある。

しかし、テレビ局のプロデューサー氏の大部分はエリートで、皆欧米の大学への留学経験があつて、個人対個人で話をすれば堂々たるものであるのだが。また先にも述べたように文化の基本になっている考え方が個人主義的で、個人的な能力開発については意欲は強く、理解度も高く創造的な能力をも示すに到っている。しかし、組織的な協力という点については、関心が薄い。

ところが悪いことに、テレビ制作では、システムティックな協力体制なくしてはあり得ないものなのである。

数多くの科学技術の発達の上に成立したテレビ芸術は、絵画や演劇、映画芸術と画期的に異って能率的なのは、全ての準備、全ての編集作業は事前に行われる点である。

万全の準備がなされ、しっかりした台本に集成され、全員が打合せて心をついて集中しなければ良い放送番組が作られる筈がない。またこうした態勢を側面から支える運営体制がなければどう仕様もない。

しかし、スリ・ランカに初めてテレビ放送網が出来てまだ2年、何事も初めての経験ばかり、早急な成果を期待しても無理であろう。

テレビの番組生産は、上述した様に社会の広い業種に支えられて健全な成熟を遂げるものである。直接的にはテレビ受信機の修理業、小売り業、電話、交通機関、さらに木工業、印刷、塗料などに至るまで、また社会制度、習慣、文化に根ざしている部分にまで広く深く関わり合っている全て

のものがテレビ制作と密接に結びついて支えているのであり、テレビから大きな刺激を受けるものである。例えば、スタジオ録画直前になって出演者が現れない。電話が故障で連絡がとれない。赤い塗料を途中までぬった所で、品切れになり黒い塗料でぬり直さねばならなくなった、そのためセットアップが半日遅れた、などは日常茶飯事である。制作担当者としても出来るだけ予定のスケジュール通りに仕事を進めようとしても、こうした産業、社会の未発達のために思わぬトラブルのために予定を大きくオーバーしてしまわざるを得ない場合が多い。

こうした事態を一番残念がっているのは、我々日本からきた事情も解らない指導者？たちよりも、現地のエリートプロデューサーの方なのだ。

スリ・ランカの視聴者の期待を担って、テレビ局に入ったエリートとして愛国心もプライドも充分持っている。彼等は恥をしのいで、スケジュールの後れた事情を言訳けしにくる。しかも彼等は決して怠っていたのではない昨日も一昨日もほとんど寝ないで、私の下で台本を書き書き直し、家へ帰って浄書しコピーをとり、あるいはVTRを編集し、精一杯働らいているのである。発達した日本のTV局の素晴らしいシステムと未発達なスリ・ランカの事情との間にはさまれて悩んでいるのは、むしろ現地のプロデューサー諸氏の方なのである。こうした認識を抜きにして一方的な押し付けを行っても良い効果を得られるとは思えない。

しかし、現実にはこうした様々な習慣や社会的条件の未整備からくる困難が、テレビ番組制作のスムーズな技術移転をはばんでいることは否定できない。まして、設備や機材が充分でなく、スペアパーツも不足勝ちなテレビ局である。一つにつまずきは次の困難を生み、悪循環を引起す。どこかで一つの番組制作を丸々中止せざるを得ないような場合、何故中止するのかとう問いに答えるにはどう言えば良いのか？ 満足な文章にもならない言葉を詰らせながら、テレ笑い、苦笑、屈折した心の底を聞いてくれるまで、ピリピリするカレー料理を手づかみで食べながらヤシ酒のアラックを飲み交わす付き合いをしなければ中々心を通じ合わせることはむづかしい。

しかもこの国は、ポルトガル、オランダ、イギリスと三ヶ国に450年の間植民地として統治されてきた。そして戦後完全に独立以来30年にならない。

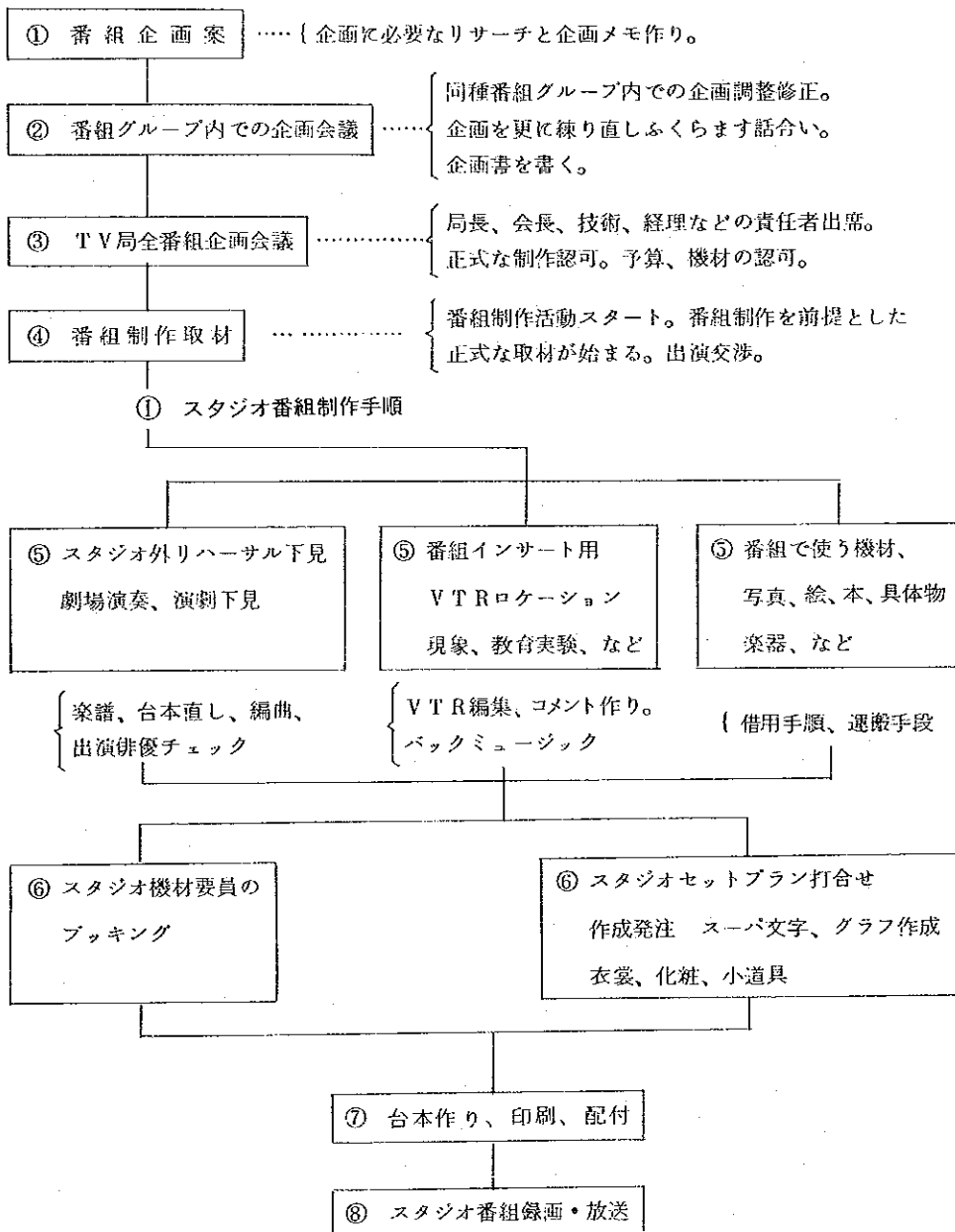
自由主義経済圏に替<sup>て</sup>を向け、民族主義的な自立更生の道を選ったパンダラナイケ政治で決定的な経済のおくれを味わい、今ようやく現ジャヤワルデナ大統領の下で自由経済に復帰し、親日的な姿勢を強めているとき、表面的な現象で軽々な判断を下すことをひかえ長い眼で見守る必要を感じざるを得ない。

さて、以上に記述した番組制作業務実施の内容はその一部に過ぎない。これはスタジオ番組制作についてのみであり、この他中継番組制作がある。それもスポーツ中継、野外の記念行事や祭りなどの生活行事の中継、劇場中継などがある。また、小型のビデオカメラ（EFPまたはENGと呼ばれている）を使ってのドキュメンタリー番組の制作などがある。こうしたスタジオ以外の野外や実際の家や、ホテルを借りての番組は、スポーツ中継などと同様にセット費用が掛からず、また社会教育を目指したドキュメンタリー番組などの需要は、この国の社会の現状から見ても大変に多い。

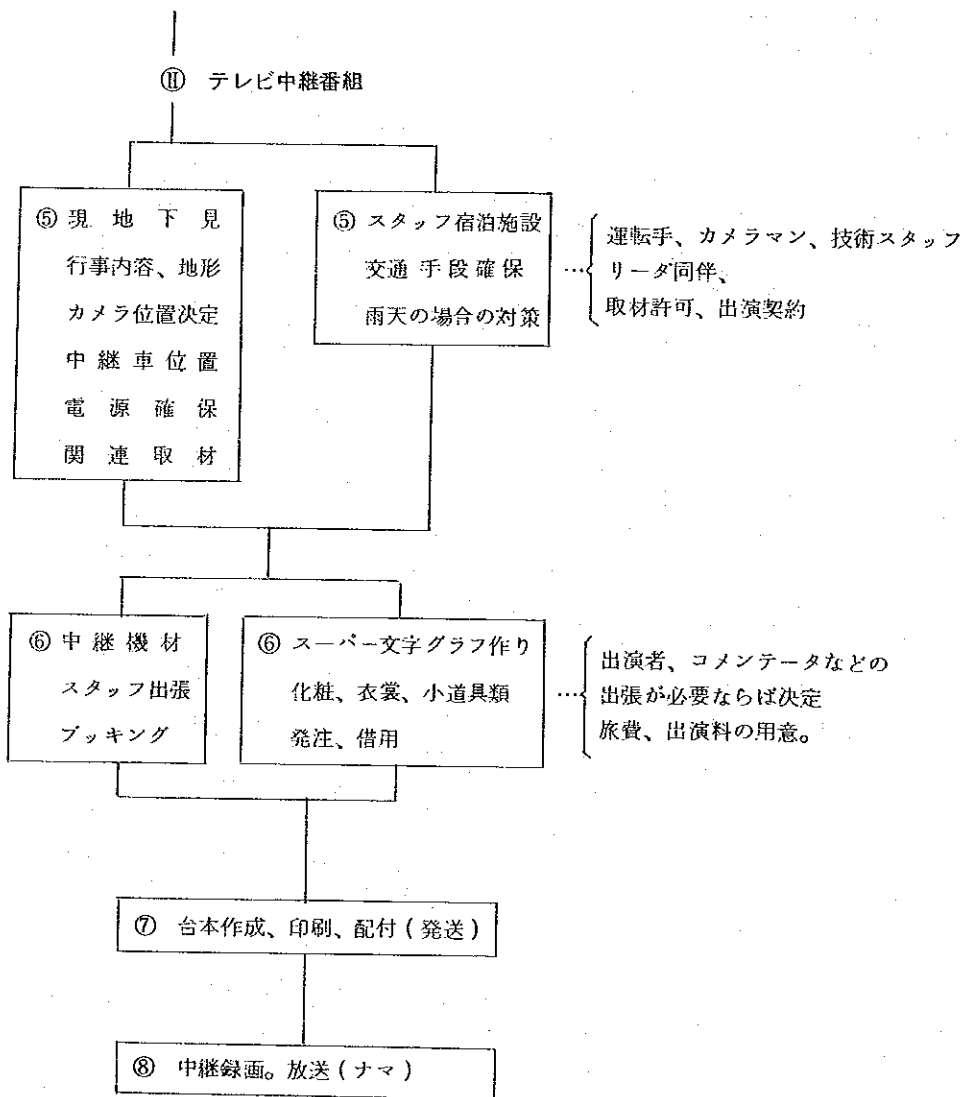
次に示す表はこうした番組制作手順を簡単に示したもので、現地での指導で使用したものである。

以上に教育テレビ番組制作を加えたものが実施業務の内容と実際である。

先にも述べたようにテレビ制作業務については現地側で全く初めての経験と言うこともあって、細目にわたっての具体的要請が出せるところ迄行っていないスリ・ランカ、ルババヒニのリーダーと相談しながら、そうしたリーダー諸氏のTV局運営や教育制度施行にアドバイスしながら、最低限必要な技術移転として行ってきたものである。



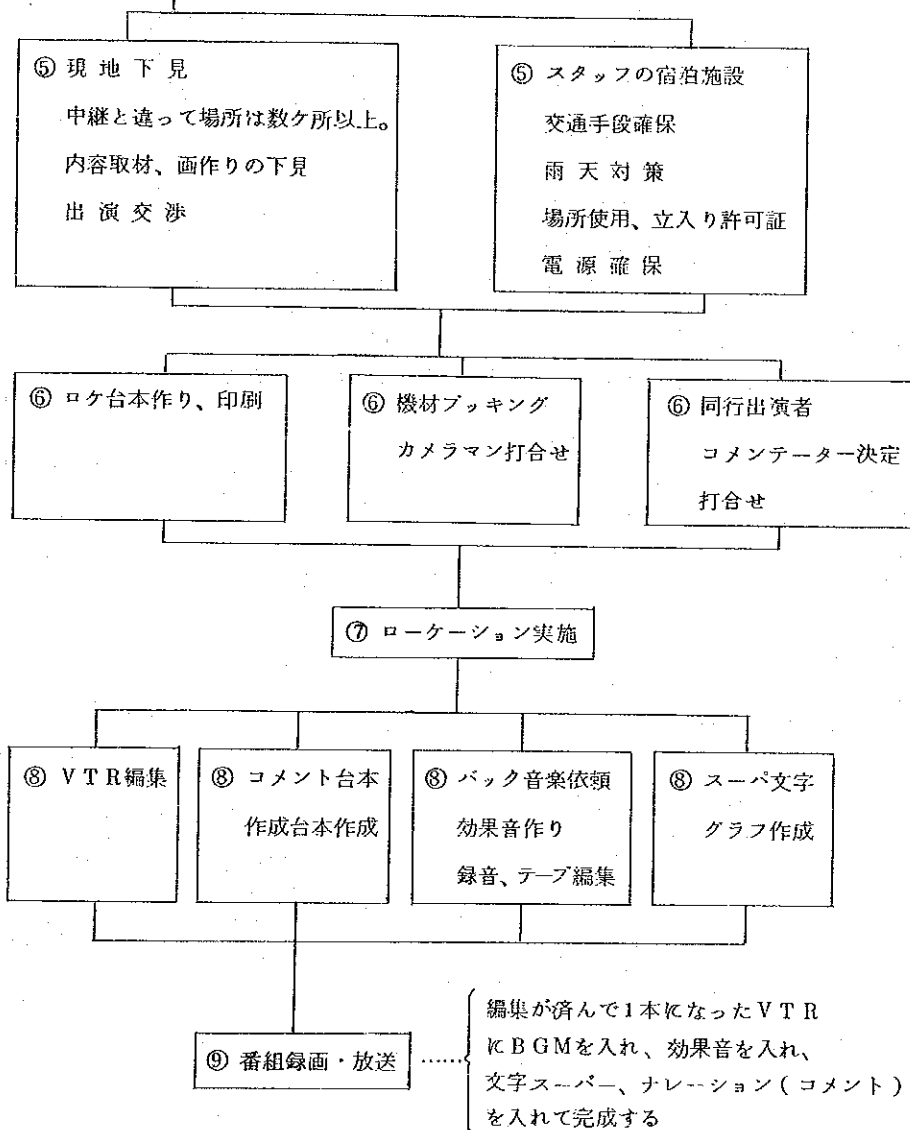
{ セットアップ、技術打合せ、技術準備、出演打合せ、リハーサル、修正、VTR }



〔現地セットアップ、技術打合せ、技術準備、出演者打合せ、リハーサル、録画、放送〕



Ⅲ VTR小型カメラによるドキュメンタリー



{ 技術打合せ、ナレーター、音楽、効果テスト、録画、放送 }

## 4. 業務目標設定と達成、成果

### 4.1 自主制作番組2時間枠の確保

放送局の業務成果を計る一つの方法に、制作された番組放送時間を目安にすることが出来る。スリ・ランカにTV放送施設が供与されたとき、日本側のコンサルタントが示したのは1日2時間平均の放送時間が適切であるとの指摘であった。この根拠は二つのスタジオ(200㎡、100㎡)で1日平均2本ずつの30分番組を作ることが可能であること。この他中継車制作や、小型VTRカメラによるドキュメンタリー番組制作、再放送番組、ニュース番組制作などを加味して考えれば、第一回供与の機材施設で可能であると言うことである。またスリ・ランカの国土の広さ、社会の発達状態からして、番組需要が恒常的にどの程度見込めるかといった点からしても妥当な目的設定と言わねばならない。

この一日平均2時間と言う目標達成には10ヶ月要し、その恒常的な達成と技術定着に1年を要した。そして1年2ヶ月後の58年5月16日からは教育テレビ番組の放送開始と相俟って目標時間数を軽くオーバー、安定した番組供給期に入っている。なお、番組(製品)需要の面から述べれば、スリ・ランカ社会は急速に映像文化時代に適応し、番組の質量、種類とも要求は高まる一方で、TV局は対応し切れないといった状況である。

こうした具体的な成果を示すものとして番組放送表をあげておく。

スリ・ランカ、ルパバヒニTV放送は総合テレビ放送を毎月夕方の6時から10時30分～11時過ぎまで平均4～5時間放送し、教育テレビを月曜から金曜まで、午前10時～12時30分まで2時間余り放送している。

### 4.2 熟練した制作要員プロデューサーを育成する

業務内容、研修業務の項で述べたように、放送開始前に育成出来た一人前のプロデューサーは2～3人であったが、開局後は5～6名になり、その後“On the Job”或は“Workshop”から育ったプロデューサーは20名以上に増えている。ところでこうした技術移転業務を通してスリランカ、ルパバヒニの要員に獲得されていく技能や知識は、当然個人的な資質によって左右されるが、一番早く学ばれていくのは、個人的な知識、資質を延ばしてゆく部分である。しかし、テレビ番組制作に於ける特徴とし

1983年1月17日 ~ 23日 第4週放送表(自主制作総時間15時間55分 日平均2時間6分)

| 曜日<br>時間 | 月   | 火   | 水   | 木  | 金   | 土   | 日  |
|----------|---|---|---|--|---|---|--|
| 18:00    | "サマランガヤ"<br>子ども向け<br>バラエティ(自製)<br>バラエティ(自製) | 子ども向け<br>"サーキ"(自製)<br>映画(アメリカ)<br>Electric<br>Company<br>(アメリカ・子ども) | 3.2.1>Contact<br>(アメリカ・子ども)<br>Science Report<br>(イギリス・子ども) | "ガヤナ"<br>子ども向けみんなの歌<br>マンガ(アメリカ)<br>ワサンダ サマヤ<br>青春青年向け(自製) | Sesame<br>Street<br>(アメリカ・子ども向け)  | ピアンパベイリス<br>アニメドラマ(自製)<br>スポーツ番組(自製)<br>タメウエドマ<br>今週のトビックス(自製)    | ラマフルワ<br>子ども向けバラエティ(自製)<br>トイン超特撮(自製)<br>Darry the Dragon<br>(子ども向けイギリス) |
| 19:00    | ニュース(タミル語)                                  | "   | "   | "  | "   | "   | "  |
| 20:00    | Blake's Seven<br>(アメリカ・家庭向け<br>宇宙科学もの)      | スポンサー教育(自製)<br>"カラライ"<br>アランガム"<br>タミル芸能<br>バラエティ<br>(自製)           | Star trek<br>(アメリカ・<br>宇宙もの、<br>家族向け)                       | Bigfoot Wildboy<br>(イギリスドラマ)<br>カワルワ<br>今週の出来事(自製)         | Mind your<br>Languages<br>(オーストラリア・コメ<br>コメディ)<br>Muppet Show<br>(アメリカ・子ども喜劇) | ドキュメンタリー<br>コム団とコム底表(自製)<br>ラタラヤナガスタ(自製)                          | ネズサヲ<br>社会教養番組<br>(自製)<br>"発表するスリランカとあひだ"<br>各大陸へのインクビ。<br>番組(自製)        |
| 21:00    | Wuthering<br>Heights<br>(イギリスTVドラマ)         | インタビュー<br>短編映画作家<br>インタビュー<br>コレサ医師(自製)<br>Big Valley(アメリカ)         | "フットキータ"(自製)<br>(スリ・ランカ伝統音楽)<br>"タミル語映画"                    | "シンハラ映画"   | "この人だきく"<br>(ドキュメンタリー<br>時の人)(自製)<br>"サフランガ"<br>(音楽もの)(自製)                    | ジエフィランガピタヤ<br>スリ・ランカ演劇場<br>(自製)<br>音楽の探尋座<br>(スリ・ランカの音楽家)<br>(自製) | ポーランド<br>スリ・ランカ伝統音楽の夕べ<br>(自製)<br>ドキュメンタリー<br>黒島 黒いダイヤモンド<br>(自製)        |
| 22:00    | Charlie's<br>Angels<br>(アメリカ<br>探偵もの)       | アメリカ西部<br>研究物語り   | (映画続き)  | (映画続き)   | "   | 土曜<br>夜の映画劇場<br>(アメリカ映画中心)  | ヴェガス<br>探偵ドラマ<br>(アメリカ)  |
| 23:00    |   |   |   |  |   |   |  |

1982年4月26日 ~ 5月2日 第18週放送表(自主制作総放送時間7時間15分 1日平均1時間2分)

| 曜日<br>時間 | 月   | 火  | 水  | 木  | 金                                  | 土                                 | 日   |
|----------|---|--|--|--|------------------------------------|-----------------------------------|---|
| 18:00    | 3.2.1 Contact<br>(アメリカ)<br>子ども向け  | Electric Company<br>(アメリカ)<br>子ども向け        | ムツハラ(自製)<br>子ども宗教(自製)                              | ラマベレー<br>子ども宗教(自製)                               | Sesame Street<br>(アメリカ)<br>子ども向け   | Telematch<br>(西ドイツ)<br>ゲーム        | ピドナテイダ(自製)<br>子ども向け   |
| 19:00    | Big Blue Marble<br>(アメリカ)<br>子ども向け  | "学校の花"<br>学校の児童の踊りと歌<br>(自製)               | Scien ce Report<br>(イギリス)<br>Follow me<br>(イギリス継承) | セスンリランカ<br>手藝教室(自製)<br>水ス<br>社会教育(自製)            | "知ってますか?"<br>(自製)<br>クイズ           | "                                 | ランオンチラ<br>スリ・ランカ音楽<br>(自製)                                  |
| 20:00    | Follow me<br>(イギリス) 英語入門<br>First Aiel<br>(イギリス) 健康<br>Charlie Chaplin<br>(アメリカ) 映画 | ダイヤナワ<br>舞踊<br>(自製)<br>世界の芸術と入々<br>(各国の制作) | Blakes Sevens<br>(アメリカ)<br>TVドラマ                   | カラリアランガム<br>(自製)<br>タミル芸能バラエティ                   | Different Strkoo<br>(アメリカ)<br>コメディ | "                                 | "   |
| 21:00    | ニュース<br>(シンハラ語)   | "  | "  | "  | "                                  | "                                 | "   |
| 22:00    | Music of World<br>(日本) 雑奏<br>シンハラ映画   | Cosmos<br>(アメリカ)<br>科学もの                   | スリ・ジャガワルチアブーラ<br>トキメンダリー(自製)<br>タミル映画              | アスワタヤ(自製)<br>Round He World<br>80 days<br>(アメリカ) | Big Valley<br>(アメリカ)<br>ドラマ        | The Cavaliers<br>(イギリス)<br>フォーク音楽 | ギータバンニ(自製)<br>音楽のタペ<br>Circus of He Stors<br>(アメリカ)<br>サーカス |
| 23:00    | ニュース(英語)<br>(映画続き)  | 折儀式(自製)<br>国会議事堂開設<br>を祝う弘毅式典。             | (映画続き)   | Oscars 82<br>(アメリカ)<br>オスカー受賞式                   | "                                  | "                                 | "   |
|          |   |  |  |  |                                    | 土曜夜の<br>映画劇場<br>(外国映画)            | 続き  |

④ 4/29(水)

国会議事堂開設式生中継放送を前9時5分  
から後1時5分まで  
ジャワワルチアブーラから放送(特別番組)

教育テレビ番組放送表 1983年5月16日～

| 曜日<br>時間   | 月                      | 火                         | 水                           | 木                              | 金   |
|------------|------------------------|---------------------------|-----------------------------|--------------------------------|---|
| 10:00<br>} | 動物学<br>(シンハラ語)         | 動物学<br>(再放)<br>(タミル語)     | 化学<br>(シンハラ語)               | 化学<br>(再放)<br>(タミル語)           | 動物学<br>(再放)<br>(シンハラ語)  |
| 10:20      | 英語<br>フオロミー<br>(シンハラ語) | 英語 (再)<br>フオロミー<br>(タミル語) | 英語<br>サドリナプロジェクト<br>(シンハラ語) | 英語 (再)<br>サドリナプロジェクト<br>(タミル語) | 英語 (再)<br>フオロミー<br>(シンハラ語)  |
| 10:45<br>} | 物理学<br>(シンハラ語)         | 物理学<br>(再)<br>(タミル語)      | 植物学<br>(シンハラ語)              | 植物学<br>(再)<br>(タミル語)           | 物理学<br>(再)<br>(タミル・シンハラ交互)  |
| 11:10<br>} | ニュース<br>(シンハラ語)        | ニュース<br>(タミル語)            | ニュース<br>(英語)                | ニュース<br>(英語)                   | 教室の話題<br>(ノンフォーマル)<br>日本はじめ世界の<br>各国の教養・イ<br>ンフォメーション<br>の長尺ものを紹介 |
| 11:25      | 応用数学<br>(シンハラ語)        | 応用数学<br>(再)<br>(タミル語)     | 純数学<br>(シンハラ語)              | 純数学<br>(再)<br>(タミル語)           |   |

\* 12年生(日本の高校3年)のサイエンスクラス  
の生徒のみを利用対象にしている。

\* サイエンスクラスから大学へ進学する数は小学校  
入学時の生徒数を100とすると0.3%である。  
大学受験生は2%。

\* タミル語の再放送番組は材料はシンハラ番組と同  
じものを使用しているがTVチャーター・図紙や  
スリーバ文字などは全てタミルの教師、タミル文字  
を使って作り直したものをあてる。  
タミル語で制作されたものは、逆にシンハラ語に  
される。

\* 「ニュース」は前日夜のニュースを再放送する。

\* 英語番組はイギリスBBC制作の図紙版を説明部  
をそれぞれ言語にタビニングして使用。

\* 月～日までの7日間の1日平均自主制作番組時間  
数を算出するのはむづかしいが1日平均約30分  
は自主放送時間と考えてよいであろう。

て、異った専門分野のスタッフが演出意図に従って組織的に協力して初めて効率の良い生産体勢が確立されるのにもかかわらず、こうした横のつながりを組織的に求める技能については習得されにくい。必ずしも日本方式をベストのものとして強要してきたつもりはないので、この国の伝統習慣に適した組織的な協力体制を作ってほしいと公開討論研修などで強調しつづけてきた。この結果、個人的な技能の習熟に比例して少しづつ前進のキザンが見え始めている。一方個人的なテレビ番組制作技能の基礎的な部分の習得が或る程度進んでくると、普遍的な制作技法からはずれてくる。今までの2年間で、基礎的な技法はまず定着したと考えている。

今後は、習得された基本のチェックとネグレットされている部分の補習、そしてやや高度な演出技法の移転ということになる。制作技法は高度になればなる程、特殊な個別的なものとなって行かざるを得ない。“On the Job”などの個別指導が中心となるキメ細い対応が必要になってくる。

#### 4.3 効果的、能率的な放送業務の運営体制を確立する

前項で述べた組織的な協力体制の確立である。

番組制作、あるいは放送業務の手順と効率的に進めるため、業務規定を作ることである。これはスリ・ランカで最もおこなわれている部分で、最も必要とされている部分でもある。何故ならば、こうした体制規定の設定は、施設、機材の使用、労働管理、番組の品質管理などを効率的におこなう上に不可欠のものである。こうした運営面での指導はデリケートな面が多い。一方的な強要は逆効果を生む恐れもあるので、先方の自主性を尊重しながら気長に対応して、試行錯誤の中からよりよい方法を見付け出して行くようにしたが、この国では組織は経験や能力の少ない者を引揚げるためであるのではなく、より力があり権力のある個人に奉仕するために私物化されやすい。

原因は今まで述べた様に伝統文化や習慣の違いにもあるが、直接には、指導者層を初め関係者にテレビ番組制作とは何であるかと言うことが十分に理解されていなかったこと。そして二つには、社会開発事業の進歩が充分でないため、発注された仕事計画どおり納められない事に由来している。今後テレビ事業の理解や社会の近代化が進んでくると従って或程度の

解決が期待される。

#### 4.4 教育テレビの制作と教育現場での利用、定着について

スリ・ランカの教育テレビ番組利用は、12年生（日本の高校3年生相当）のうち大学の理工科系、主として医学部、工学部への進学を目指す、サイエンスクラスと呼ばれるエリートクラスの生徒のみを対象にして導入された。これはスリ・ランカ側の高校教育拡充のねらいからである。地方の高等学校には優秀な理科教師が不足しており、十分な実験なども出来ない、大学入試の範囲だけはテレビを通じて中央の学校に劣らない教育を与えようと言うことである。そうは言っても高価な教育テレビ番組の制作費、TVセットの配付、機器のメンテナンスである。高い費用を掛けるTV利用教育は、まずエリートクラスの生徒たちに無駄なく利用させようと言う気持はあったであろう。こうして全国450校の理科コースのある高等学校からETV利用教育は始った。そして教育テレビ番組に要求されている内容と番組制作者側への要請であるが、これは全く教師の代替を求めたものである。極端なダイレクト・ティーチングスタイルと言われる類の番組であって、知識そのものを並べ立て、全てを暗記させようという方法である。

映像メディアのTVには、映像と言う、人間の感覚や直観に強くうったえてくる長所はあるが、印刷メディアに属する教科書、ノート、板書の代用品はつとまらない。こうしたテレビの限界、長所を無視して、ただやみくもに文字や公式を並べ、TVティーチャーが言葉で説明して生徒に暗記させようとしても、せっかくのテレビ利用教育を混乱させているにすぎない。なぜならばテレビの映像は、映像に内在する力によって推しすすめられ、それ自体完結した世界を提示する。だから教室の教師による事前、事後の指導が不可欠である、教室の教師によって、テレビの映像の論理は言語に翻訳され、公式や数式に普遍化され整理されて、生徒の頭の中に知識として定着される。

テレビから得た豊かな映像刺激や感覚は、こうして初めて言語命題の形の知識に定着される。テレビは教師の代理にはなり得ない。しかし、教育への需要の強い発展途上のスリランカでは議論よりも生ずやってみることで、そして自分たちの体験に裏付けられた事実として改善へと主体的に動き出すことが大切であろう。その意味で1983年5月から始った教育テ

テレビ放送が、一年の経験と効果を知った1984年からは新しい試みへの始動の時期となるのであろう。

#### 4.5 施設、機材の保守、スペアパーツなどの補充などへの自助努力

一年間のギャランティ期間のために故障した部品や初期故障、また取扱未習熟や過失によるものの保守は何とかできた。それにこの期間内に機器の使用にも慣れることが出来た。スリランカにテレビ放送が始って2年、視聴者の要求は急激に高まってきた。

一般の人々、有力文化人や産業人、政府側などからテレビで放送してほしいと言った要求が多くなっている。国営放送局であるからには、国の政策や為政者側の情報を十分に国民に伝えることも大切な役割の一つである。また娯楽に飢えている多数の人々からの要求は大変強い。こうしたところでプロデューサーたちは出来るだけ質の高い番組を作ろうと努力している。制作効率が必ずしも良いとは言えないところへ新しい制作要求が割り込んでくる。

スタジオ施設や機器の稼働率は大変なものになる。予定表ではスタジオ機器の保守日(休日)となっているにもかかわらず、前から順に繰下ってきたスケジュールのため、暗黙の了解で作業が行われることもしばしばである。加えて58年5月からは教育テレビの放送制作が付け加わってきた。目下設備、機材の使用率は100%を越えはじめ、これ以上どうにもならない状態となっている。機材の損耗は、常識を越えて高く、その補給には可成りの予算を充てなくてはならない。またテレビ放送局の運営に当っては、供与され設備機材を活して行くためには、人件費や事務費と言ったものだけでなく、種々の自助努力がなされなければならない。

以下それらの主なものについて言及したい。

スリ・ランカのテレビ局は、設備の重複をさけるため、以前からあったラジオ局の一部門としてテレビ局が想定されて供与された。その後スリ・ランカ側の事情のためテレビ局はラジオとは別に独立した組織として運営されることになった。そのため建物の事務管理部分はほとんどなく、テクニシャンと言われる技術要員などは、居室さえない。そのため、元はオープンスペースのカーポートであった一階の吹抜部分などが囲われて、グラフィック(美術)部、資材部、図書資料、ENGカメラ部、監査部、視聴者調



査部などが作られた。また現在の建物の裏手に事務管理棟が1983年5月から建設され始め1984年中に完成の予定である。

ビデオテープの編集機の一対も新たに購入され、現在使用中である。小型VTRカメラ(ENG)3台が新たに購入されカメラ取材部として独立、従来の2台と共に、ドキュメンタリー取材、ニュース、番組インサート取材などに活躍している。

交通事情の悪さをカバーするために、乗用車9台、バン2台、ジープ4台、小型バス2台、小型トラック4台が購入され取材などに活躍している。

以上放送開始以来ようやく2年を経たスリ・ランカ・ルパバヒニTV局への番組企画、制作技術移転の経緯とその成果の概略である。

制作開始以来、決定的な失敗や大きなトラブルもなく、政府および国民の要求やニーズに答えて、まず順調な進歩、発展を続けてきた。しかしながら、効率的な制作や運営に多少の未整備な部分が残っていることは否定出来ない。それは如何に文化や習慣の違いがあろうと、また社会や関連産業の未発達をしんしゃくしても、テレビ番組の制作を行うならば、最低限守られねばならぬことであり、テレビメディアからの要請でもある。現在こうしたウイークポイントをカバーしているのは、少数の有能なプロデューサーと技術要員の献身的な活躍である。そして人海戦術とも言える安い人件費の労働力である。

## 5. スリ・ランカ・ルパバヒニの放送の効果と提言

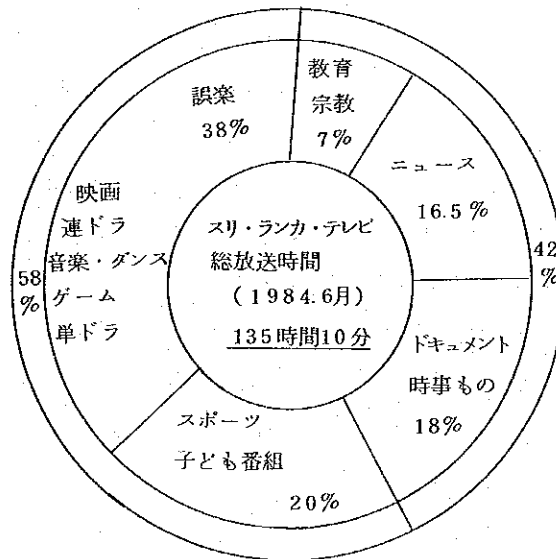
スリ・ランカでのテレビ放送はどんなものなのか1983年6月の資料で見てみたい。7、8、9月は、タミル、シンハラの民族紛争の影響で放送予定も大巾に変更されたりして偏りが見られるし、それ以後の数字は未だ出ないため、紛争前で放送活動が安定している最近のものと言うことである。

先にもふれたように、アメリカ、ヨーロッパのTV局の制作した番組が多数UマチックのカセットVTRに収録されて、東・西南アジア地域のVT局に数多く販売され放送されている。番組の主なものは「セサミストリート」「Electric Campany」「チャーリーズエンゼルス」「ハワイ500」「Big Valey」「Different Strokes」「3, 2, 1, Contact」「Tele - match」「Doctor No」「アンディウイリアムズショウ」などのショウ番組などの他語学（英語、独語）講座もので、時には長尺のTVドラマ、例えばイギリスBBCの「アンナカレーニナ」なども入ってる。こうしたカセットは“Fairmont”, “Trans Tel”, “Granada”, “Sovexpoet Films”, “Selqnic”, “Colombia”, “NFCL”などのエージェント（配給会社）を通じて流されてくる。値段は60分につき100ドルから200ドルと大変に安い。言葉は全て英語に直してあって、カタログやシノプシス写真などが完備され買い手はその中から選択する様になっている。番組名を見てもそれぞれ良心的な作品である。中には変色している程古いものもあるが、いつれの番組も本国のしかるべき機関が著作権料やロイヤリティを済ました上で、安い値段で市場へ廻してきている。これはほとんど供与といってもよい程の厚いサポートをして、自国語、自国文化のPR輸出？に努めている。しかも大切なのは、買手に押しつけるのではなく、選択して買っているのだと言う気持を失わせないところである。多少高価なものでも400ドル位までであって、往年の名画と言われるフィルムでも1本370ドル前後で廻している。

こうした欧米のカセット番組はシンガポール、マレーシア、インドネシア、香港、フィリピン・タイなどに定期的に大量に流れ、いつれの局でも総放送時間の1/3から1/2に近く、これ無くして放送は成立しないまでになっている。スリ・ランカに於いても同様で、6月の総放送時間、135時間10分に対し自国制作番組は58%（78時間10分）外国製輸入番組は、42%（57時間）となっている。なおこの自国制作番組の中には、自国で作られた古いシンハラ・タミル語の映画（週各1本ずつの放送）も含まれて

いる。これを番組の種類別に見ると次の表になる。

|   | 番組の種類    | 放送時間                             | 小計                               | 全体に占める% |
|---|----------|----------------------------------|----------------------------------|---------|
| 1 | 娯楽もの映画   | 23 <sup>h</sup> ・30 <sup>m</sup> | 51 <sup>h</sup> ・25 <sup>m</sup> | 38%     |
|   | 連続ドラマ    | 11・10                            |                                  |         |
|   | 音楽・舞踊    | 8・45                             |                                  |         |
|   | その他      | 5・30                             |                                  |         |
|   | 単発TVドラマ  | 2・30                             |                                  |         |
| 2 | 子ども向け    | 18 <sup>h</sup> ・20 <sup>m</sup> | 27 <sup>h</sup> ・05 <sup>m</sup> | 20%     |
|   | スポーツ     | 8・45                             |                                  |         |
| 3 | ドキュメンタリー | 18・20                            | 24 <sup>h</sup> ・30 <sup>m</sup> | 18%     |
|   | 時事・報道    | 6・10                             |                                  |         |
| 4 | ニュース     | 22・30                            | 22 <sup>h</sup> ・30 <sup>m</sup> | 16.5%   |
| 5 | 宗教もの     | 4・50                             | 9 <sup>h</sup> ・50 <sup>m</sup>  | 7%      |
|   | 教育もの(成人) | 5・00                             |                                  |         |



娯楽番組に属するものの比重がやや大きく60%に近くなっており、ハードな報道もの農業や産業に関する社会教育的なものがやや少ない印象を受ける。なお、学校教育番組は午前中にこれとは別に組まれており、夜の総合テレビとの割合は教育番組26%、総合番組74%となっている。ニュース番組は、毎日15分のを、国語であるシンハラ語、タミル語、公用語の英語ではほぼ同一内容のものを放送している。放送の効果・社会にもたらした影響といったものは、これを定量化して云々することは大変むづかしい。ただ印象的に気がついた現象を挙げておくにとどめる。

最近コロomboなどの都市にテレビの修理屋が目立つようになってきた。映画製作の本数が急に少なくなってきた。インフレーションのためコスト高になったことも原因の一つであると言われるが、テレビの影響で収益が上らないことも確かである。スリ・ランカの各地、特に農村地帯で、夕方真赤な太陽が西に沈む頃になると、公民館や、大きな自作農の家のTVセットの前に子どもやお年寄りを中心にした群れが出来熱心にTVの画面を眺めている。こんな風景はもう特異なものではなく、ごく日常の平和な風景の一つとなっている。

1983年10月、12月、1984年4月と3回にわたって、大統領選挙、国会議員選、地方議員選があった。いずれもその開票日には、TVでナマの開票中継が夜を徹して放送された。これは大変な視聴率を挙げ、道行く人の姿さえ少なくなり、皆TVの前へ集まった。刻々と伝えられる正確な情報のため、従来は非常に多かった悪質なデマゴグや、情報不足から生じる不必要な混乱や不安感はすっかり影をひそめたと言う。開票日には恒例により酒の販売は禁止、集会禁止、全国の警戒体制はしかれたものゝ、あてはずれの平静な開票日であった。

また昨年1984年7月25日から始まったタミル・シンハラ民族紛争時にも、1時間毎に各主管大臣がテレビ画面に顔を出し国民に訴え掛け、話掛けた。その内容は別として、それぞれデマを否定し背景についての政府見解を話して、国民を説得した。人心はそのため急速に落ち着きを取り戻し、もしもテレビがなかったら混乱はもっと長引いたであろうと言われている。

TVはラジオや新聞と違って、その人を、その情報をカラー映像によって客体化するため、視聴者は情報にアジテートされるよりは、客観的に見返す余裕ができ、冷静に対処させるのに大変効果がある。こうしたTV放送の効

果を政府関係者も大いに認めたため、TV局に対する態度や関心が強くなり、それまで会長兼任であった総局長のポストに情報省の部長を84年末には送り込んでくるなど、積極的な動きが良かれ悪しかれ出て来た。

この様にテレビ放送による情報の伝達力は、その拡がりや浸透力が大変大きい。日本側としては、せっかくハードの設備、機材を供与したのであれば、出来るだけ多くの優れた日本制作の番組を定期的、組織的に流して、日本文化の理解PRに努めてはと痛感している。欧米各国の人々と話す機会がある毎に、「日本はハードの設備を作っておきながら、どうして自分の国の番組を流さないのか？お人好しにも程がある」とはよく聞かされる話である。

年に一、二回開かれる、お茶会や生花の展示、日本舞踊の会、宝塚パレーやN響のコンサート等々予算と労力を掛ける割りに目立たない。もうそんな時期は過ぎた、皆、お花やお茶のことは或程度知っている。知らないのは、日本の日常生活であり労働組合活動であり、茶の間の暮しであり、日常どんなことを考えているかなのだと言われる。

日本は金は出す、経済進出はする、商品は売る、しかし文化は出さないと言われているそうであるが、良質のテレビ番組を定期的な配給網にのせて組織的に提供して行けばどれだけ多くの国際的相互理解と協力を得られることが計りしれない。

現地には強い需要はある、欧米人ですら興味があると言っている。その為には、国家的な資金援助でロイヤリティをクリアーし、外国語(英語)への翻訳ダビング吹き替えと資金や手間はかかるかもしれない。しかし効果の方も大きい筈である。さしづめ一番付き合いの多いアジア地域への配給を中心にしていけばどんなものであろう。この場合大切なのは番組を無料で供与することではない。あくまで、買手の選択にまかせ、安い料金であっても自分たちが買ったものだという気持を大切にしなければならない。アジア地域の放送局のほとんど全てには何らかの日本の援助がなされている。現在、ソフトの供給の面も併せて考えることも、こうした国々との相互理解を進める上で大切ではさかろうか。その場合勿論、アジアの国々のTV番組も日本国内で放送されることも含めての話である。





JICA